

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

各種地図調整・印刷/地理情報システム
立体地図・地図模型・地図パネル・地図掛け軸
オンデマンドデジタル印刷・大判ポスター出力



株式会社 **アルプス出版**
〒461-0004 名古屋市東区葵一丁目15番18号
オフィスサンナゴヤ 6F

TEL.052-931-1009 FAX.052-932-1312

<http://www.alpspublishing.co.jp/>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

元気でてくる「ことばたち」

196



撮影・鶴崎燃

村上信夫

がふと「あなたは男の子っぽいから、宝塚に行けばいいの」と言ったことがきっかけで宝塚受験を思い立つ。母の何気ない一言に心を揺さぶられた。

だが、高校の進路指導の先生からは「宝塚は美人か

気にこなした。どんな時も笑いを忘れなかつた。

先生たちから「お前のような何も知らない田舎者ほど怖いものはない」と言われていた。

新人公演で主役を務めたときも、「お前もうあきらめろ！」と言う先生の言葉を「自由によつていいんだ」と解釈して、本番は稽

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオピタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。

現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」(毎週日曜10:00~)、月刊『清流』連載対談〜ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。

1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのピタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。
<http://murakaminobuo.com>

ばつていないイメージがあつて以前は好きになれない言葉だつたが、がんになって鹿兒島に帰つたとき、がんばり過ぎる自分に祖母が「てげてげにしあんせよ」と言っていたのを思い出した。故郷を出てから必死に走つてきたが、もつとゆるめるべきだつたと反省した。アクセルを踏みつばなしだつた自分に少しブレーキをかけて、「よい加減」にしていこうと思つた。

「私の根っこは鹿兒島にあつて、そこから枝葉を伸ばして都会で花を咲かせるつもりが、栄養が行き届かず枯れかかっていたと気づいたんです。根っこに意識を向けて等身大の自分に戻そうと思つたそのときから、大きく息を吸えるようになりました。」

闘病中も、苦しいときほど笑つているので、人からは辛そうに見えない。病院内でも「明るいがん患者」と評判だつた。抗がん剤治療のときも、腕をアイスピックで何度も突き刺されるような血管痛があつても、ナースコールを押さずに耐えた。だが、あまりの痛さで夜中にうずくまっていたら、看護師さんが病室に飛んできて、「ごめんなさいね。痛いのを気づいてあげられなくて」と言われた。とたんに、体が溶けるように柔らかくなつて涙がポロポロ出てきた。やさしい言葉をかけられたり、誰かに自分の思いが伝わつたりすることが、こんなにも体に作用するんだと実感した。

「とくに私は言葉に影響されやすいようです。私はなぜこの病気になつたのかと考えたとき、あれこれ悪かつたところを、いろいろ反省して、『ごめんなさい、ごめんなさい』とひたすらノートに書きました。そしてすべてに対して『ごめんなさい』を書き切つたら、次は『ありがとう』を書きたくなつたんです。それで一つひとつに感謝して『あ

りがとう』と書いていたら、体の状態や数値がみるみるうちに良くなつていったんです。」

伴侶の言葉の力も大きい。マッサージ師をしている10歳年下の夫とは、宝塚の退団公演前に体のケアしてもらつたのがきっかけで出会つた。プロポーズされた直後に、がんが発覚したが、献身的に支えてくれた。「どんなに素の自分をさらけ出しても、受け入れてくれる人つてすごいなと思ひました。抗がん剤で毛が抜けて、女性とは思えない物体がのたうちまわっているのに、まったく動じない(笑)。イライラして罵詈雑言を吐いても、『抗がん剤が効いているんだね』と、薬のせいにしてくれて救われました。本音をすべて出せたことが、病気の治癒につながつたような気がします。」

本音を吐き出したことで自分の気持ちを認識し、心のデトックスが出来たのだ。言葉で、心のケアもしてもらつたのだ。

愛華さんは、宝塚時代から闘病生活に至るまで、「ことばの力」によつて支えられてきた。

特効薬は

「ありがとう」「ごめんなさい」

〜女優 愛華みれさん〜

愛華みれさん。名前の如く、華がある。愛がある。タカラジエンヌだつたから当然といえばそれまでだが、華々しいというよりは、人生の修羅場を潜り抜けたあとの爽快感から来る華やぎともいえるようか。醸し出す空気が快適で、会話の端々に愛を感じる。すっかり、ときめいた。

1964年の鹿兒島県生まれ。1985年に、宝塚歌劇団に入団。華やかな顔立ちと正統派の男役として人気を博し、1999年、花組のトップスターになった。2001年の退団後も女優として活躍してきたが、2008年に悪性リンパ腫を発症した。しかし、持ち前の明るさと強い精神力で病気を克服し、奇跡の復活を遂げた。

ことばの力が人生切り開いた

愛華さんは、自分の口にした言葉がその通りになつたことや、言葉一つで体の状態に影響が与えられたことを実感している。言葉は、きちんとした意識をもって発しなけばと考へている。

小学生の頃から「夢を描け。夢の翼を休めるな」という言葉が好きだつた。祖母の家のカレンダーに書いてあつた言葉が心に強く刻まれ、宝塚を受験したときもその言葉が支えになつた。

剣道一筋の少女だつたが、高三のとき、母

バレエやピアノをやっている人が入れるところだから通るわけがない」と頭ごなしに言われた。その言葉に発奮した愛華さんは、「先生は、私はまだ何もやらないうちに夢を摘み取る気ですか」と啖呵を切って受験した。ところが、受験したものの、試験で渡された譜面に斜線を引いていたのがわかつた。もう駄目だと諦めていたら、よもやの合格。未知の可能性に賭けてみたいと思わせる魅力があつたのだろう。のちに、面接官の中のすごい偉い先生が三重マルをつけてくれたと聞いた。

考へてみれば、あの厳しい世界で、よく生き抜いてこられたものだ。「何も知らずに入つた世界なので見るものすべてが新鮮に感じられ、そのまま受け入れられたからなのかもしれない」と振り返る。「お嬢さん育ちの人はお掃除の際、雑巾の絞り方もわからず、私がやつてあげたほど(笑)」。下働きの仕事ですべて自分に回つてきて、元

古通りにやらす、自分流の演技でやつて驚かれた。

そういう性格を形作つたのは、薩摩の風土が大きい。鹿兒島では家でも学校でも男の人が上で、年功序列がはつきりしていて、目上の人を敬う。だから長幼の序列が厳しい宝塚でも、違和感なくやつていけたのだろう。

ことばの力が何よりの治療薬

病気になつてからも、言葉の力で救われた。鹿兒島弁でいう「てげてげ」。どこかがん



俳画/イネ・セイミ

「とくに私は言葉に影響されやすいようです。私はなぜこの病気になつたのかと考えたとき、あれこれ悪かつたところを、いろいろ反省して、『ごめんなさい、ごめんなさい』とひたすらノートに書きました。そしてすべてに対して『ごめんなさい』を書き切つたら、次は『ありがとう』を書きたくなつたんです。それで一つひとつに感謝して『あ

嬉しいことばの種まき

好評発売中

イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

常滑屋
とき 俳画教室月二回 午後一時〜三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

インディアンフルート教室開講中

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなたも今日からインディアンフルートを奏でる姿が素敵です。楽しく個人レッスン致します。

講師 イネ・セイミ
(日本インディアンフルートサークル協会ディレクター)
レッスン 30分3,500円 会場 半田市榎ヶ丘
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimi@oasis.ocn.ne.jp

入会受付中!!

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (46) 岡田 清治

嫁の就職2
それにしても真三は知多や愛知についてモノの本からの知識が多いと舞と話していて実感している。この話もその一つである。

「日本一元気」と噂されている島を訪問した時のことである。元気を正確に測定することなどできないが、印象として、「日本一と言ってもいいくらい元気なことは間違いないことだった。」

まず、「日本一元気とも言える島は、愛知県知多半島の突先からこぼれ落ちたような位置にある日間賀島。周囲五キロ、人口二千人ほどの小さな島。一周をぐるりと回っても、一時間もあれば十分である。とにかくこの小さな島に、観光客がどっと押し寄せている。民宿や旅館、ホテルは、ちょっとした改装ブーム。何よりも、島の人達の元気が魅力だ。」

そもそも、日間賀島は、昔から元気だったわけではない。大きな声を出して叫べば聞こえそうなくらいに間近には、ほぼ同じ大きさの篠島がある。伊勢神宮にお供える鯛を取る場所として名高い篠島は、かつて、日間賀島とは比較にならないくらいに賑わっていた。知多半島の河和から来た定期船の客の九割は篠島に向かい、途中で立ち寄る日間賀島には一割ほどの客しか降りない時代が長く続いた。

当時、日間賀島の中には、「島国の中のさらに小さな島国根性」がくまなく浸透していた。島の産業の中心である漁業者と、観光業者とは犬猿の仲。周囲五キロしかない島なのに、東地区と西地区とは対立し合っている。要するに、みんな、自分だけの小さな利益に凝り固まっていた。

「このままでは、日間賀島は経済的に沈没してしまい、若い連中はみんな、島の外に出てしまおう、そんな危機感が、島の人達の意識を根本的に変えるきっかけとなった。こんな小さな島で、漁協だ、観光協会だ、東だ、西だど争っている場合ではない。島全体のためにみんな、手をつなごうではないか」と呼びかけるリーダーが現れた。大同団結だ。

日間賀島の周辺の海は、天然フグの好漁場である。今まで、漁業者は、自分達が取ったフグを下関の市場に運んでいた。自らの利益だけを考えた、それが一番得だから。しかし、大同団結した時から、考え方が変わった。「せっかくならば来てくれた人達に、おいしいフグを食べてもらおうではないか」ということになった。漁協と観光協会が手をつないだからこそ、実現したことである。観光客に漁業の体験をしてみようではないかといった案も、現実のものになった。旅館やホテルに客が押し寄せると、漁業者の奥さん方の力が大事な戦力として求められ始めた。

かつて、定期船から一割ほどの人しか降りなかった日間賀島に、今は、九割の客が降りるようになった。フグのシーズンになると、週末は、どこの旅館も食堂も満員。島の若い人達も、大車輪の活躍である。(『Brain Trust』)
「この話は叔父さんの知り合いの上甲晃氏が書いたコラムと記憶しているが、叔父さんが日間賀島へ出か

けたのは、元気な島になってからかなり時を経過していた。
「行ったことがありませんが、叔父さんのお話を聞いて一層、行きたくまりました」
「舞さんの就職が決まりましたらお祝いに、家族でフグを食べに行こうか。おいしいよ」
「はい。」

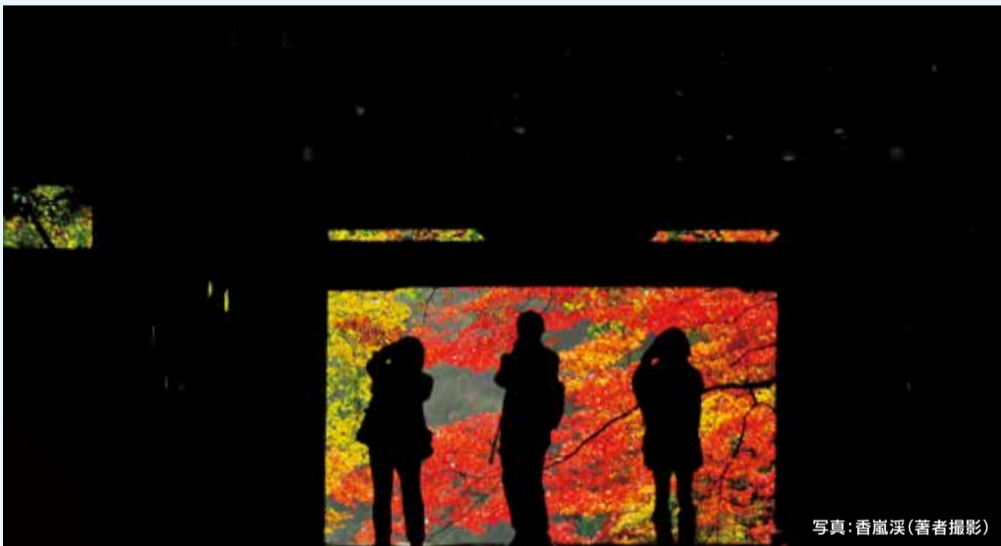


写真:香嵐溪(著者撮影)

そういう真三も一度行ったきりである。この島名は知多や名古屋の人は知っている。ここ十年来、有名になり観光客とくにフグの季節(十月一日〜三月末)は民宿、旅館、ホテルは平日でも大盛況である。愛知県はもとより関西、四国からもやってくるという。名古屋から名鉄で河和まで特急で約40分、そこから河和港まで無料バス三分ほどで着く。港から高速船に乗って二〇分で日間賀島西港に到着する。真三が行った日は平日で一五時〇五分発の便だったがほぼ満員であった。

宿泊は「インターネットで探してきた」とエレベーター案内嬢に告げると、「あたり」と肩をたたかれた。「すず屋海遊亭」という旅館で、船を降りると正面に見えるシックな旅館である。受付の女性に例の雑誌コラムのようなことだったのかと確認したら「その通りです」と教えてくれた。

ここは全部で十六部屋しかなく、この日も満室だという。休日はよほど早くから申し込みないとれないようだ。夕食は天然フグコースである。食べ応えがあった。
日間賀島で旅館の外を散策した限りでは民家は風を避けるためか結構、密集しているように思えた。この島はタコ漁も盛んである。港を歩くとタコつぼがたくさん積まれていることでもわかる。伊勢湾や外洋では底引き網漁で捕っている。

「このタコは一匹丸ごと塩ゆでする。豪快だよ。甘味があってうまいね」
「新鮮な魚介類に恵まれているのですね」
「マダイやスズキなどのほかにタイラギ(平貝)、ナミガイなどの貝も水揚げされている」
「景色もいでしょうね」
「夕日がとくに美しい」

真三はかつて日間賀島へ行った時のことを思い出しながら舞との会話を続けた。
「日間賀島へは必ず連れて行ってあげる」
「叔父さんはよほど気に入ったのですね」
「知多半島に話を戻すと、この気候は温暖で常緑樹や広葉樹が多いね。丘と海でできている。高い山も広野もない。かつては木綿業や醸造、とくに酒造が盛んだったね」
「いつごろですか」
「全盛期は明治維新の前あたりだよ」と聞いた

「どうですか」
「ところで繊維は知多半島だけでなく名古屋はかつて繊維王国と言われたほどです。江戸時代に大野あたりは木綿生産が盛んで、「大野木綿」のブランドで江戸へ運ばれたのです」
「だから知多半島は海運業も盛んだったのですか」
「大野村、現在の江野村は江戸時代、尾張藩の保護で海運業が栄えたそうです」
「そうですか」

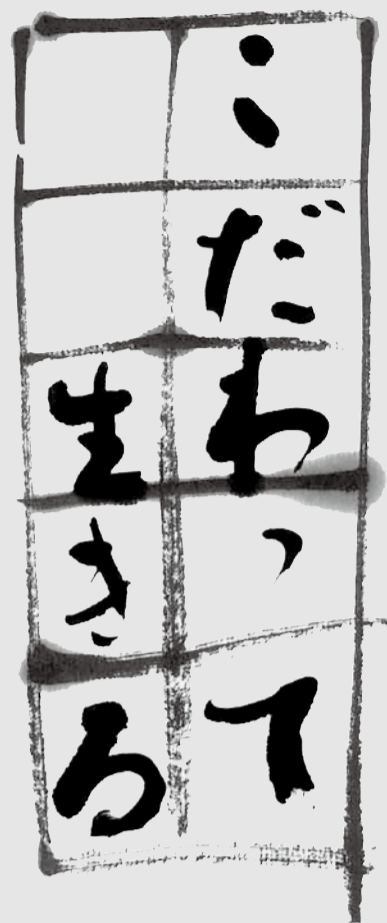
「これから行く常滑に廻船問屋・瀧田家の建物が残っている」
「大野町も歴史を感じさせるところのようですね」
「今回は行かないが、大野町は鎌倉時代、三河から伊勢に抜ける重要な中継点で、お寺や格子のある家並みがあつて港町の情緒を味わえる」
「いいですね」
「大野海岸は世界最古の海水浴場として謳われている」
「本当ですか」
「どうもそうらしいが確かには知らない。それより写真をやっているの、この夕日はすばらしいと思う。伊勢湾の向こうの鈴鹿山脈に沈む太陽はいいね」
「ロマンティックですね」
「半島の突端部は紀伊半島の白浜に似て、リゾートとしてとくに夏場は活況を呈している」
「そうですか」
「今日はまず、知多半島の中央部、中部国際空港側に位置する常滑に行こうと思う。空港に行つたことがあるなら常滑は通つているが、町は歩いたことがないだろうね」
「はい、空港へ直行しましたので。」
「常滑はセントレア空港ができたので常滑から鉄道が空港まで延びた。空港の名称に常滑の冠があれば、知名度が上がつただろうが、セントレア空港では常滑は思い浮かばない。お客も常滑を素通りして飛び立つことになる」
「なるほど、ですね」
「空港が地元・常滑の経済の起爆剤にはなっていないと話す人も多い」
「成田や関空でも地元への波及効果が少ないとも聞きますが、同じことなのでしょうね」
「これは常滑焼が有名なところですよ」
「質のいい粘土があつたのでしょうね」
「常滑焼は日本六古窯の一つです。越前(福井)、瀬戸(愛知)、信楽(滋賀)、丹波(兵庫)、備前(岡山)と並び、古常滑焼は平安時代に始まったと言われ一千年の歴史があります」
「すごいですね」
「中世の頃は皿、茶碗、片口鉢、大甕など大きいのが特徴だった。江戸時代の終わりに連房式登り窯が現れ、素焼の土管、壺や瓶(かめ)などがつくられた」
「清水焼のイメージとは違いますがね」
「現地に行くと、赤煉瓦の大きな煙突が今も見られる。煙突の長さを見れば、窯の大きさがわかるそうだ。昭和の初期一九二本建つていたが、今は三分の一に減つているそうです」
「赤煉瓦の煙突ですか、すてきですね」
「手造り技法が受け継がれ、クラシックから前衛的なものまで幅広く扱っている」
「そうですか。中部国際空港のターミナルの壁にも常滑焼が使われていた記憶があります」
「よく覚えていたね。旅客ターミナルビル一階団体待合ロビーには、国際的に活躍する市内在住の陶芸家吉川正道氏の陶壁作品「The water of life」が「渚」があります。彼は常滑に工房を構え製作を続けておられる。また常滑焼は伝統的工芸品産地として政府認定を受けている」



著者・岡田清治おかせいじ
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集)ロダクシオンNET108代表
著書に『高野山開創二百年いっばんさん行状記』『心の遺言』『あなた社員を全能力を引き出せますか』『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。
今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX: 0569-347971
メール: takamitsu@akai-shinbun.net

絵手紙集



絵文 縦山善久

返文 小林玲子

縦山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。
丸栄陶業株式会社代表取締役。
碧南商工会議所会頭。
愛知県陶器瓦工業組合理事長。
全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。
平成十三年藍綬褒章受賞。
平成二十二年旭日小授章受賞。
丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。
京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科
洋画コース四年次在学中。

小林玲子

碧南市に育つ。
西尾市在住
共著「西尾の民話」
童話「サケの子ピッチ」
随筆「海辺のそよ風」
(中経コリアム「閑人帳」より)
ミュージカル脚本
「みぐりちゃんのおうち」ほか



そゆきわと
容をよ迎へる
椿かな



102才の岡島良平翁から頂いた紅椿

椿は冬から春にかけて花が咲き、俳句では春の季語になっています。椿は万葉集の頃から親しまれて千利休の時から茶花の主役です。冬場の茶席で床の間の一輪挿しにさりげなく椿の花が飾られていると心を和ませて、「わび・さび」独自の世界が生まれる最高です。ある茶道家茶匠から「椿にまつわる花言葉も聞きました。茶席の床の間に、紅椿の花が挿しあれば、今宵は貴方をお待ち申している」とのこと。絵手紙添書その俳句は「そゆきわと・容をよ迎へる・椿かな」「紅椿を挿し入れるに昔勞しました。」

生命力溢れる椿の絵添なく拝受致しました。
夏は木槿、冬・春は椿と、茶花はこれで決まりですね。
原種が日本というのも嬉しいですね。
御絵はつつら椿紅椿デスネ
さて、「いがまんじゅう」のこと。
辞典によりますと「毬饅頭」は、江戸時代元禄の頃、大阪の生玉神社の付近で売っていた名物の饅頭。栗の毬に似せたものか、とあります。
勉学の志をお立てとおききました。
すばらしいですね。
百二歳のお方の椿も応援しているみたいです。
ご健勝にてご活躍下さいませ。

